

## I Can't Believe That You're In Love With Me

恋のためいき

### Eddie Higgins Trio

エディ・ヒギンズ・トリオ

#### 1. ストレイト・ノー・チェイサー

Straight No Chaser《T. Monk》( 4：37 )

#### 2. ポール・トーダ・ア・ミーニャ・ヴィーダ

Por Toda A Minha Vida《A. C. Jobim》( 3：34 )

#### 3. ア・ウルフ・イン・シック・クロウシング

A Wolf In Chic Clothing《E. Higgins》( 5：30 )

#### 4. ケビンス・ワルツ

Kevin's Waltz《K. Eubanks》( 5：45 )

#### 5.恋のためいき

I Can't Believe That You're In Love With Me《Fields & McHugh》( 4：21 )

#### 6. 愛のテーマ

Love Theme From The Invasion Of The Body Snatchers《D. Zeitlin》( 4：33 )

#### 7. ブルース・フォー・アーサーズ

Blues For Arthur's《E. Higgins》( 4：57 )

#### 8. サンライト・イン・ベイジン

Sunlight In Beijing《E. Higgins》( 4：45 )

#### 9. セリア

Celia《B. Powell》( 6：02 )

#### 10. アブラコ・ア・セルジオ

Abraco A Sergio《E. Higgins》( 2：54 )

#### 11. スピーク・ロウ

Speak Low《K. Weil & I.Gershwin》( 5：44 )

#### 12. 愛しき日々

Those Quiet Days《E.Higgins》( 3：55 )

**エディ・ヒギンズ** Eddie Higgins - piano

**ケビン・ユーバンクス** Kevin Eubanks - guitar

**ルーファス・リード** Rufus Reid - bass

録音：1990年12月21日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

\*

Reissue Producer：Tetsuo Hara.  
Produced by Eddie Higgins & Francois Zalacain.  
Recorded：December 21, 1990, At The Studio, New York City.  
Engineered by A.T. Michael MacDonald  
Remastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound：  
Shuji Kitamura & Tetsuo Hara.  
Front Cover：© Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo.Designed by Taz.

よりメロディーを強調することができる。ギターとピアノが一緒になってユニゾンのラインを奏でることでもできるし、ギターとピアノとが対位的なラインを描き出すこともできる。さらにピアニストが奏でるブロック・コードなどにも対応して、ギターがスリリングなパッセージを弾き出すこともできるというわけだ。“ 僕自身、いままでベースとドラムスとのトリオで演奏してきたわけだけど、60年代の終わり頃に一度だけ、ギターのフィル・アップチャーチと、ベースのリチャード・エバンスと一緒にトリオでプレイしたことがあったっけ。でも、その時はレコーディングされなかったから、今回が初めてのギターとベースのトリオでの録音ということになるね・・・” と、エディ・ヒギンズ自身が言っている。

ここでのトリオを固めるメンバーは、ベーシストのルーファス・リードと、ギタリストのケビン・ユーバンクスのふたり。ルーファス・リードは、アトランタ出身のベテラン・プレイヤーで、しばらくシカゴで活動したのち、76年にニューヨークへ出て、サド・ジョーンズやアート・ファーマーをはじめとする一流プレイヤーたちと多くのセッションをこなしてきている“ ルーファス・リードとは70年代はじめ、まだシカゴにいたときからの友人で、何回もセッションをこなしてきた。でも一緒に吹き込んだのは、これが初めてなんだ。揺るぎないビートと、独創的なベース・ライン、そして素晴らしいソロの数々を楽しませてもらったよ・・・”

いっぽうギターのケビン・ユーバンクスはフィラデルフィアの生まれで、80年代はじめ、アート・レイキーのビッグ・バンドを振り出しに、自身のコンボを中心にプレイ。新感覚のギター・スタイルで大きな注目をあつめてきた。“ ケビン・ユーバンクスの評判は聴いていた

けど、このスタジオで初めて顔を合わせたんだ。彼はアコースティック・ギターも持ってきた。だからブラジリアン・ナンバーでは、また違った肌合いが出せたんじゃないかな。ケ빈はフュージョン・ギタリストとして有名になっているようだけど、ストレート・アヘッドなジャズ・プレイも、信じられないくらい素晴らしいね・・・”

このアルバムを吹き込んだあとエディ・ヒギンズは、本アルバムと同時に国内発売になる「恋去りし時」( 94年 ) や、既にヴィーナスが権利を買いとって発売している「黒と白の肖像」(96年)「愛の語らい～ジョビン作品集」(2000年)などのアルバムをサニーサイドからリリース。並行して1997年より、わが国のヴィーナス・レコードに録音をおこなうようになったのである。なお、これらヒギンズのトリオ作品のほとんどはベース、ドラムスを従えた編成になっているが、2002年にヴィーナスへ吹き込んだ「ベッドで煙草はよくないわ」は、本アルバムと同じ、ギターとベースを加えたトリオ編成になっていたことを、ここに記しておきたい。

国内盤アルバムのタイトルになっている<恋のためいき>は、ジミー・マクヒューによって1927年に書かれた古いスタンダード・ナンバー。いきなり即興プレイから入り、ヒギンズとユーバンクスによるスリリングなインタープレイが展開されてゆく。あと、スタンダード曲は<スピーク・ロウ>のみで、ヒギンズのオリジナルが5曲も含まれているという点にも注目したい。<ア・ウルフ・イン・シック・クロウシング>は、このレコーディングのためにニューヨークへ向かう飛行機の中で作られたもの。セントルイスの弁護士でジャズのDJもつとめる、友人のドン・ウルフに捧げられている。<ブルース・フォー・アーサーズ>も、マイアミのレストラン・オーナー、アーサー・ホロヴィッツを思っって書いたもの。<サンライト・イン・ベイジン>は、スタンダード曲“ムーンライト・イン・ヴァーモント”のコードを借りたメロディーに、オリエンタル調の味付けをしてみせた作品で、有名なスタン・ゲッツ～ジョニー・スミスのバージョンをイメージしたものになっている。<アブラコ・ア・セルジオ>は、ブラジリアン・ピアニストでバンド・リーダーのセルジオ・メンデスに捧げられた曲。65年にシカゴへやってきたメンデスと意気投合し、以来ヒギンズとメンデスは仲の良い友人になっている。<愛しき日々>は、やはりシカゴ時代にヒギンズがプレイをおこなっていたレストラン“マキシム・ド・バリ”の、フランス風の雰囲気に触発されて書いたものだという。<ケビンス・ワルツ>は、その名のとおりケビン・ユーバンクスによる瞑想的なワルツ・ナンバー。<セリア>は、ヒギンズが初期に大きな影響を受けたというバド・パウエルの名作。そしてアントニオ・カルロス・ジョビンの秘曲<ポール・トーダ・ア・ミーニャ・ヴィーダ>は、まさにヒギンズの雰囲気にとったりのボサ・ノヴァ・ナンバーである。面白いのはピアニストのデニー・ザイトリンによって書かれた<愛のテーマ>で、これは「ボディ・スナッチャー」という70年代初めのSF映画のための作品。電子音楽中心のサウンド・トラックのなかで、ロマンティックな光を放つこのメロディーは、ヒギンズのお気に入りのもになっているのだという。セッションを終えたエディ・ヒギンズは、こんな風に言っている。“マンハッタンのソーホーにあるスタジオでレコーディングをおこなったのは、12月の雨の日の午後のことだった。外は寒くても、スタジオの中はフレンドリーで、音楽の暖かさにあふれていた。あの子のことを思うと、とても微笑ましい気持ちになる。アルバムを聴いた人たちが、そんな気持ちになってくれたら嬉しいね・・・。”

岡崎 正通 (http://www.bestjazz.jp)

エディ・ヒギンズというミュージシャンには、まさに“ピアノの魔術師”という形容がふさわしい。どんな時でもヒギンズのピアノは、聴き手の心をリラックスさせて、最高に良い気分させてくれる。しかも彼の演奏は、いつも第一級のジャズとしてのスリルや素晴らしい即興のひらめきといったものもっている。どんなに聴き馴れたナンバーであってもヒギンズの手にかかると、ひとつひとつのメロディーが、また新たな光を放ちはじめる。それはエディ・ヒギンズならではのピアノ・マジックとしか呼びようのないものなのだ。このアルバムは、そんなエディ・ヒギンズによって1990年、サニーサイドというマイナー・レーベルへ吹き込まれたもので。メロディックかつロマンティックな彼の個性が十二分に発揮された、素晴らしい作品である。

ところでエディ・ヒギンズといえば、近年わが国のヴィーナス・レコードからリリースされている多くの作品によって、ジャズ・ファンのあいだでポピュラーな名声を獲得してきた。ヒギンズがヴィーナスでの初アルバム「魅せられし心」を吹き込んだのは1997年のこと。以来ヒギンズがこのレーベルへ録音した作品というのは、僅に10作を超えている。しかしそれ以前のエディ・ヒギンズはというと、ごく少数のファンの熱い支持を受けてはいたものの、けっして幅広い人々にその存在を知られてはいたわけではなかった。言ってみればヒギンズは、知る人ぞ知る“隠れた名ピアニスト”だったのである。そんなエディ・ヒギンズに、ヴィーナス以前にスポットを当ててみせたのが、ほかならぬサニーサイド・レーベルだった。1932年2月、マサチューセッツ州のケンブリッジに生まれたエディ・ヒギンズは、まだ学生だった50年代の初めにプロ・ミュージシャンとしてデビュー。兵役から戻った56年の秋からトリオを率いて活動し、翌57年から69年まで、およそ12年間にもわたってシカゴのクラブ“ロンドン・ハウス”の専属ピアニストとして、トリオを中心に活動をおこなっていた。そして70年代になるとヒギンズは、フロリダのフォート・ローダーデイルに居を移し、暑い夏には故郷のケンブリッジにほど近いケーブ・コッドで暮らすようになる。また80年には初めて日本にもやってきて、数ヶ月滞在していたのだったが、当時ヒギンズに注目した人は多くなく、このことはほとんど話題に上らなかったように記憶している。その間に何枚かのアルバムをリリースしたものの、ヒギンズは中央のジャズ・シーンからは忘れ去られたような存在になっていたのである。1990年頃になって、そんなヒギンズに目を留めたサニーサイド・レーベルが吹き込んだアルバムが、この「恋のためいき」(原タイトルは「Those Quiet Days」)で、ヴィーナス・レコードが一連の吹き込みをおこなうようになる前にヒギンズ再認識のきっかけを作った作品として、ファンには忘れることのできない一枚といえることができるだろう。

本セッションの特徴としては、まず編成からドラムスをはじめ、ピアノ、ギター、ベースというトリオで演奏されていることが挙げられる。同じピアノ・トリオでも、この編成はアコースティックな要素が強いだけに、エディ・ヒギンズのピアノ・タッチの美しさがいっそう際立ってくる。もともとピアノ、ギター、ベースという編成は、ピアノ・トリオの基本になっていたもので、1930年代の末からナット・キング・コール・トリオがこのフォーマットによって、多くの忘れがたい演奏を残してきた。コールのことを信奉していたピアニストのオスカー・ピーターソンも、ギターにハーブ・エリスを加えて、このスタイルを踏襲。のちにドラムスを加えたトリオになってからも、ピーターソンは折にふれてギターをグループに加えて演奏をおこなってみせていた。ギターを加えたトリオは、ドラムスとのものに比べると、